

行動主義心理学用語 10

江川剛史

【著作権について】

- このレポートは著作権法で保護されている著作物です。
- このレポートの開封をもって下記の事項に同意したものとみなします。
- 使用者は本レポートから得た情報を、著者の事前の許可なく複製、転載、流用、転売する事を禁止します。
- このレポートに書かれた情報は、作成時点での著者の見解等です。著者は事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行う権利を有します。
- このレポートの作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等がありましても、著者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。
- このレポートを利用することにより生じたいかなる結果につきましても、著者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

行動主義

行動主義は心理学のアプローチの1つで、内的・心的状態に依拠せずとも科学的に行動を研究できるという主張である。行動主義は、唯物論・機械論の一形態であると考えられ、あたかもブラックボックスのような外からは観察ができない心の独在を認めていない。多くの行動主義者に共通する1つの仮説は、“自由意志は錯覚であり、行動は遺伝と環境の両因子の組み合わせによって決定されていく”というものである。

20世紀、精神分析学のムーブメントと同時期に、行動主義学派は心理学に浸透した。行動主義に影響を与えた主な人物には、条件反射を研究したイワン・パブロフ、試行錯誤学習を研究したエドワード・ソーンダイク、内観法を破棄し、心理学の実験法を問い直したジョン・ワトソン、行動主義にプラグマティズム的な倫理的基点をもたらし、オペラント条件づけの研究を先導したバラス・スキナーなどがある。

[アプローチ]

全ての行動主義者にも共通するようなアプローチは存在せず、多様な主張が存在する。

その代表的なものの幾つかを以下に挙げておく。

行動の観察が心的過程を研究する最高・最善の方法である。

行動の観察が心的過程を研究する唯一の方法である。

行動そののみが心理学の研究対象である。例えば「信念」や「性格」といった心的概念を表す一般的語彙は、単に行動への傾向性を主題とするための方便にすぎず、指示対象として何らかの心的実体を伴う訳ではない。

[ジョン・ワトソン]

20世紀初頭、ワトソンは、自著『行動主義者の立場からの心理学』の中で、意識を研究する学問としてではなく、行動それ自体を研究する学問としての心理学を主張した。これは、その時代の心理学の主流であった構成心理学との決別を意味していた。彼のアプローチは、イワン・パブロフの研究に強く影響されたものであった。パブロフは、犬の消化機構の研究の過程で条件反射(古典的条件づけ)の現象を見出し、詳細にこの現象を研究したソ連の生理学者である。ワトソンは、生理学を強調しながら、生活体の環境への適応について、特に生活体から反応を引き出す刺激について研究した。彼の研究の殆どは、動物の行動を研究する比較心理学的なものであった。

なお、ワトソンのアプローチは、条件反射を誘発する刺激を重視したので、刺激-反応(S-R; stimulus-response)心理学とも表されている。また、ワトソンの主張する行動主義の立場は、ワトソン以後の行動主義である新行動主義と対比して、古典的行動主義とも呼ばれている。

[方法論的行動主義]

方法論的行動主義とは、ワトソンが唱えた行動主義の要素の1つで、行動の観察を心理学の研究方法とする立場である。なお、新行動主義以降の方法論的行動主義では、行動の観察によって行動と環境の媒介である生活体や心的過程を研究する立場となっており、ワトソンが唱えた行動主義における方法論的行動主義が、生活体や心的過程を設定しないものであったこととは異なっている。

ワトソンの行動主義理論は、多くの実験心理学者に行動研究の重要性を痛感させた。特に、比較心理学の領域では、心的説明を動物に自由に当てはめたジョージ・ロマネスなどの擬人的解釈による研究に対して突き付けられた警告、(モーガンの公準:ある行動がより低次の心的能力によるものと解釈できる場合は、その行動をより高次の心的能力によるものと解釈すべきではないという節約説)と、ワトソンの主張が一致していた。そのため、比較心理学の研究者们は、ワトソンのアプローチに賛同したのであった。この中には、猫が問題箱から抜ける過程を研究したエドワード・ソーンダイクがいる。

また、その他の心理学者の殆ども、現在、方法論的行動理論と呼ばれることになる立場を支持した。彼らは、行動主義は、心理学の中で観察が容易な方法に過ぎないと考えたが、心的状態について研究するのに使用できるとして、この立場を取った。方法論的行動主義を採用した20世紀の行動主義者には、クラーク・ハルやエドワード・トールマンなどがいる。ハルは、自身の立場を新行動主義と表現した。また、エドワード・トールマンは、後の認知主義に繋がる研究を行った。トールマンは、報酬が無くともラットは迷路の認知地図を形成すると論じ、刺激と反応(S→R)の媒介として、第3の用語、生活体(organism)を導入した(S→O→R)。なお、トールマンのアプローチは、目的論的行動主義とも呼ばれている。

現在でも、方法論的行動主義は殆どの実験心理学者が採用する立場となっており、心理学の主流となっている認知心理学の研究者たちの殆どもこの立場を取っている。

[バラス・スキナーと徹底的行動主義]

スキナーは、体系化された行動主義哲学を構築した理論家・実験家・実践家である。彼の構築した行動主義哲学は、徹底的行動主義と呼ばれている。そして、その哲学と共に、彼は行動分析学という新しいタイプの科学を作りだした。

[定義]

スキナーは、徹底的行動主義を打ち立てた。徹底的行動主義は、彼が行った研究(行動の実験分析と呼ばれる)を基に体制化された哲学である。徹底的行動主義は、意識・認知・内観などは観察可能な行動と同様の原理が働くとし、意識・認知・内観を行動とは異なる二元論的なものとはしない。そして、意識・認知・内観は顕在的行動と同様に科学的に論じられうるとして、それらの存在を受け入れている。

また、“全ての行動が反射である”という説明を受け入れない点が、ワトソンの古典的行動主義(S-R心理学)と大きく異なる点であり、意識・認知・内観などの心的過程に行動の原因を求めない点が、新行動主義以降の方法論的行動主義と大きく異なる点である。

[革新的な実験法と概念]

徹底的行動主義は、ラットとハトを使ったスキナーの初期の実験研究の成果によって構築された。なお、彼の初期の研究は、『生活体の行動』(Skinner, 1938)や『強化スケジュール』(Skinner & Ferster, 1957)などの彼の著書に記されている。徹底的行動主義の重要な概念は、彼が生み出したオペラント反応(ラットのレバー押しがこの反応の代表的な例として頻繁に取り上げられる)である。オペラントは、構造的に異なっても、機能的に等価である反応の事をいう。例えば、ラットが左足でレバーを押す事と右足やお尻で押す事は、同様に世界に作用し、同じ結果を生むという点から、同じオペラントである。

スキナーの“フリーオペラント”を使った実証的研究は、ソーンダイクやガスリーなどが行った試行錯誤学習の概念を、ソーンダイクのように刺激-反応“連合”を用いずに、明確化し、拡張した。なお“フリーオペラント”とは、被験体の任意な(割合での)オペラント反応である。

スキナーはフリーオペラントを使った実験で、強化スケジュール(様々な強化率)の差異による、オペラント反応率の変化の違いを、実証的に研究した。そして、行動レベルの視点で、動物に様々な種類・頻度で反応を自発させることに成功したスキナーは、その実証的研究を根拠に厳密な理論的分析を行った。例えば、論文『学習理論は必要か?』の中で、スキナーは一般的な心理学が抱えている理論的弱点を批判している。

[言語(的)行動]

スキナーは、行動の科学の哲学的基盤を考察する過程で、人間の言語に関心を持つようになった。そして、著書『言語(的)行動』(Skinner, 1957)の中で、言語(的)行動を機能的分析するための概念と理論を発表した。この本は、言語学者のノーム・チョムスキーのレビュー(Chomsky, 1959)によって厳しく酷評されたが、スキナー自身は「チョムスキーは、私が何について話しているのかを分かっておらず、どういう訳か、彼はそれを理解することができない」というコメント(Skinner, 1972)を残している程度で、このレビューに目立った反応をしていない。

スキナーは、言語獲得よりも、言語と顕在的行動の相互作用への興味が強かった。彼は、著書『強化随伴性』(Skinner, 1969)の中で、ヒトは言語(的)刺激を構成し、言語(的)刺激は外的刺激と同様の方法で行動を制御出来る事を指摘している。この行動への言語(的)刺激という“教示性制御”の存在の可能性により、強化随伴性は他の動物の行動に影響するのと同様の現象を、ヒトの行動に必ずしももたらす訳でない事が指摘された。

これにより、徹底的行動主義によるヒトの行動の研究は、教示性制御と随伴性制御の相互作用を理解する試みへと移った。そして、<どのような教示が自発されるか>や<どのような行動の支配を教示が獲得するか>を決める行動過程の研究が行われるようになった。

なお、この分野の著明な研究者には、Murray Sidman, A. Charles Catania, C. Fergus Lowe, Steven C. Hayesなどがいる。

[淘汰による行動の理解]

スキナーの行動への視点は、“巨視的”であると批判されることが多い。つまり、スキナーの扱う行動は、より核となる部分に分解できるという批判である。しかし、スキナーは、数々の論文(例えば『結果による淘汰(Selection by Consequences)』(Skinner, 1981))の中で“行動の完全な記述”について書いており、この視点は巨視的と簡単には評せないものであった。

スキナーは、行動を完全に説明するためには、淘汰の歴史を3段階に分けて理解する必要があると主張している。それらは、以下の3段階である。

- 1.生物学:動物の自然淘汰、系統発生。
- 2.行動:動物の行動レパートリーの強化歴、個体発生。
- 3.(いくつかの種が持つ)文化:その動物が属する社会集団の文化的慣習。

スキナーは、全ての生活体が、<全歴史>と<環境>との相互作用していると考えた。そして、自分自身の行動もまた、その瞬間の環境と相互作用している、<系統発生の歴史>と<(文化的慣習の学習をも含む)強化の歴史>の産物として表現した。

[哲学における行動主義]

行動主義は、心理学のムーブメントであるだけでなく、心の哲学でもある。“徹底的行動主義”では、行動の研究が“科学”であるべきだという基本的前提があり、仮想された内的状態に頼らない。一方、“方法論的行動主義”は、仮想された内的状態を利用するが、精神世界にそれらを位置付けず、主観的経験に頼らない。行動主義は、行動の機能的側面に注目するのである。

分析哲学者の中には、行動主義者と呼ばれる者や、自称する者がいる。ルドルフ・カルナップやカール・ヘンペルといった所謂論理実証主義者たちが称えた“論理的行動主義”では、心理的状态の意味付けは、実行された顕在的行動からなる検証条件である。ウィラード・ヴァン・オーマン・クワインは、スキナーの考えに影響され、言語の研究の中で行動主義を利用した。ギルバート・ライルは、哲学的行動主義に傾倒し、自著『心概念』の中で哲学的行動主義を概説した。そして、ライルは、二元論の例証では、日常言語の使用の誤解による“カテゴリーミステイク”が頻繁に生じていると考えた。ダニエル・デネットもまた、自身の論文「メッセージは;媒介などない」(The Message is: There is no Medium, Dennett, 1993年)の中で、自身を一種の行動主義者であると認めている。

オペラント条件づけ

オペラント条件づけとは、学習の一種である。道具的條件づけ、スキナー型条件づけまたはオペラント学習とも呼ばれる。E. L. ソーンダイクによる試行錯誤学習の研究をもとに B. F. スキナーによって定式化された。

ヒトを含む動物が自発する広範な行動が条件づけの対象となり、日常生活の中のいたるところで偶発的に生じている。また経験則として、子どものしつけや飼育動物の訓練などに古くから用いられてきた。スキナーとその後継者によって行動療法やプログラム学習などの応用領域が開拓され、現在では、動作や運転などの技能訓練、嗜癖や不適応行動の改善、障害児の療育プログラム、身体的・社会的リハビリテーション、e-ラーニングなど、幅広い領域で自覚的で洗練された応用がなされている。小児歯科において、治療がスムーズに進行するように利用されることもある。

[定義]

オペラント条件づけとは、オペラント行動が自発された直後の環境の変化に応じて、その後の自発頻度が増加する学習をいう。

オペラント行動とは、その行動が生じた直後の環境の変化（刺激の出現もしくは消失）に応じて、その後その行動が生じる頻度が増加する行動をいう。レスポナント行動とは異なり、オペラント行動には通常それを“誘発する”生得的な刺激（無条件誘発刺激）は存在しない。オペラント行動は個体が“自発する”行動である。

また、オペラントとはオペレート（操作する）からのスキナーによる造語である。つまり、ある行動を生起させる要因に対し、行動がある環境に操作を加えることで変化を齎すことによる。

1. 強化 (reinforcement) とは、オペラント行動の自発頻度の高まりをいう。
2. 弱体化 (punishment) とは、オペラント行動の自発頻度の低まりをいう。
3. 好子 (強化子 reinforcer、強化刺激ともいう) とは、出現したことによって直前のオペラント行動の自発頻度を高めた刺激である。
4. 嫌子 (罰子 punisher、嫌悪刺激ともいう) とは、出現したことによって直前のオペラント行動の自発頻度を低めた刺激である。

[行動随伴性]

行動随伴性とはオペラント行動の自発頻度の変化とそれが自発された直後の環境の変化との関係をいう。行動随伴性には、

1. 好子出現による強化 (正の強化)
2. 好子消失による弱体化 (負の弱体化)
3. 嫌子出現による弱体化 (正の弱体化)
4. 嫌子消失による強化 (負の強化)

の4種類がある。

また、行動随伴性というメガネを通して行動の分析を試みる事こそ行動分析学の根幹である。

[スキナー箱]

たとえばスキナー箱に絶食させておいたネズミを入れ、ブザーが鳴ったときレバーを押すとエサがもらえるようにしておく、やがて、ネズミはブザーの音に反応してレバーを押すようになり、ブザーが鳴った直後にネズミがレバーを押す頻度(確率)が増加していく。これが正の強化の一例である。

このとき「レバー押しの動作がエサで強化される」と表現される。

エサは出現したことによって直前のオペラント行動の自発頻度を高めたので好子と表現される。

絶食させたことが、餌に強子としての特性を与えた(確立した)ので、絶食を確立操作という。

ブザーはエサに先行して出現しているため先行刺激と呼ばれる。

ブザーが鳴っているときにはレバーを押し、鳴っていないときには押さなくなった場合、ブザーは弁別刺激と呼ばれる。

[トークン]

貨幣、引換券、点数など、集めることによって他の好子と交換できる好子をトークンと呼ぶ。

たとえば、課題の動作を重ねて行なうと手に入る引換券によってエサが得られるようにしておく、チンパンジーはこの課題を遂行するようになる。

強化

強化とはあるものを強くすることである。

[心理学用語における強化]

心理学用語において強化とは条件づけの学習の際に、刺激と反応を結びつける手段または、それによって結びつきが強まる働きのことである。広義には報酬、罰などの強化子の事もさす。基本的には古典的条件付けにおける無条件刺激を提示する手続きまたは、報酬を与える手続きあるいは手続きによって被験個体のおかれている状況や特定の反応との結合が強まる事をさす。個体の生存に直接関係し生得的である一次的強化と経験を通じて習得される二次的強化に分類される。

行動療法

行動療法は、心理療法のひとつで、学習理論(行動理論)を基礎とする数多くの行動変容技法の総称。近年は広義の認知療法との交流・統合が進展し、認知行動療法と称されることも多い。

行動療法においてターゲットとすべきは客観的に測定可能な「行動」であり、また目標とすべきは「望ましくない行動の低減」や「望ましい行動の増大」といった「行動の制御」であるとされる。心理療法の方向性による分類では「訓練療法」の一種ということになり、精神分析のような原因探求的「洞察療法」や来談者中心療法のような受容的「支持療法」とは一線を画する。他の心理療法に比べて時間がかからず費用も少なくすむ反面、クライアント自身の主観的体験や内面的葛藤を重視していないため、特定症状を除去したところで代わりに別の症状が出てくるだけだという批判もあるが、科学的根拠はない。

なお「療法」と称しているものの、行動療法の技法は精神科・心療内科などの医療に留まらず、種々の技能訓練、習癖の改善、リハビリテーション、障害を持つ子どもの療育、犯罪者の矯正教育など、幅広い分野において利用されている。この場合、行動変容ないし行動修正の呼称が用いられることもある。数ある技法の中には、古来より経験則として用いられてきたしつけや訓練の技法を洗練したものも含まれている。

シェイピング法

シェイピング法とは、目的とする行動の変化(増加・減少)にたどり着くために、その方向で少しやりやすい変化をもたらす所から始め、徐々に目的に近づけて行くやり方。

アサーティブネス

アサーティブネス(自己表現・意見表明)は、多くの人間発達の専門家や心理療法士が教える特質で、自己啓発書やビジネス書などでしばしば取り上げられる。アサーティブネスは、自分を大切にすることと関連しており、コミュニケーションの重要な技法であると考えられている。

アサーティブネスは、人とのコミュニケーションの取り方の一つの形態であり、思想でもある。アサーティブネスとは、攻撃的であることや、受身的であることや、欺瞞的、作為的であることではない。コミュニケーションのこれら4類型は、自分と他人の「個人の境界」をどう扱うかという点で異なっている。

受身的なコミュニケーション:受身的なコミュニケーションをする人は、自分の「個人の境界」を守らず、攻撃的な人々に傷つけられたり、不当な扱いを受けたりすることを許し、通常、他人に影響を及ぼすというリスクを冒そうとしない。

攻撃的なコミュニケーション:攻撃的なコミュニケーションをする人は、他人の「個人の境界」を尊重せず、他の人に影響を及ぼそうとして、他の人をしばしば傷つける。

欺瞞的、作為的なコミュニケーション:欺瞞的、作為的なコミュニケーションをする人は、本心は表に出さず、トゲのある言い方や回りくどいやり方で人を責める。正面から人と向き合えないため、人を操ることで自分の望む状況にもっていこうとする。

アサーティブなコミュニケーション:アサーティブなコミュニケーションをする人は、自分の心の中を開示することを恐れず、他人に影響を及ぼそうとしない。他人の「個人の境界」を尊重し、攻撃的な侵入から自分を守ろうとする。

アサーティブなコミュニケーションとは、自分と相手の人権(アサーティブ権)を尊重した上で、自分の意見や気持ちをその場に適切な言い方で表現することである。

アサーション・トレーニングにおいては、自己主張に関するいくつかの過誤に対する心理教育から始まり、攻撃的な自己主張や不十分な自己主張との違いを明らかにした上で、適切な自己主張(=アサーション)について学ぶ。方法としてはソーシャルスキルトレーニングと同じである。対人恐怖、社会恐怖やいわゆるバタードウーマンのように、自己主張に困難を感じている人が対象となる。

[定義]

アサーティブな行動は、他人と交流する際に、自分の権利を守ることを目標としている。アサーティブであることは、多くの場合、自分の利益になるが、欲しい物が必ず手に入るわけではない。アサーティブであることにより、自己肯定感が増し、また周囲の人からみてもどのように接すれば良いかが分かり、曖昧な点がなくなる。

[アサーティブネスの技法]

壊れたレコード

「壊れたレコード」という技法は、アサーティブネスの専門家達によって支持され、広く行われている。これは、不当な抵抗に出会ったら、その都度、自分の要求を繰り返して述べるという技法である。この言葉の由来は、表面に傷のあるレコードをかけると、蓄音機の針が跳んで、数秒間の録音が、無限に繰り返されることから来ている。この技法の短所は、抵抗が持続する時には、繰り返すにつれて、話し手の要求が力を失ってゆくことである。要求が過度に繰り返されると、言葉の権威は逆に低下する。そのような場合には、他の何らかの強制手段が必要となる。

のれんに腕押し

「のれんに腕押し」と呼ばれる技法を提唱する人もいる。敵対者があなたを批判しても、その言葉の一部に限定的に真実を見出し、それに賛成するという技法である。一部分だけ、あるいは原則だけなら、賛意を表明することも可能である。

欠点についての質問

欠点についてへの質問は、特定のことに、さらに批判を求めるものである。しかし、相手からの批判の一部に賛成して、自分の欠点を認めたとしても、それは決して相手からの要求を受諾するということではない。

「私」を主語にすること

「私」を主語にして述べると、自分の立場における感情や希望を、他人への評価を表明したり、他人への感情を責めたりすることなく、伝えることができる。

[応用]

アサーティブネスの訓練が、アルコール依存症の予防に効果があると述べる研究がいくつかある。

馴化

馴化(じゅんか)とは、心理学における概念の一つ。ある刺激がくり返し提示されることによって、その刺激に対する反応が徐々に見られなくなっていく現象を指す。特に、報酬をもたらすわけでも有害なわけでもない中立的な刺激に対して生じやすい。馴化は刺激を特定して起こる。つまり、ある刺激 A に馴化しているときでも、別の刺激 B を提示された場合、生体は刺激 B にはちゃんと反応する。ヒトだけでなくほぼすべての動物が馴化を示す。学習や記憶の基礎研究でよく用いられるアメフラシの他にも、原生生物であるソライロラップムシでも馴化が起こるといふ報告がある。

バラス・フレデリック・スキナー

バラス・フレデリック・スキナー(1904年3月20日 - 1990年8月18日)はアメリカ合衆国の心理学者で行動分析学の創始者。20世紀において非常に影響力の大きかった心理学者の一人で、自らの立場を徹底的行動主義と称した。B.F. Skinner 又は BF Skinner と表記されることが多い。スキナーは系統的に行動主義心理学の一員で、他にトールマン、ハル、ガスリーなどがある。

[業績]

ヒトを含む動物の行動をレスポナントとオペラントに分類し、パブロフの条件反射をレスポナント条件づけとして、またソーンダイクの試行錯誤学習をオペラント条件づけとして再定式化し、行動分析学を体系化した。彼の方法は帰納的で、徹底的行動主義の立場に立つ。外側から観察可能な行動に限らず、人間が行っているすべての行動を研究対象として、反応強化子随伴性、三項強化随伴性の枠組みから、オペラントと環境との関わりによって行動が形成・維持・抑制する過程を分析した。ワトソンの古典的行動主義、や、ハル、トールマン、ガスリーらの新行動主義と共通しているような誤解を受けることが多いが、行動をこころの科学的な研究ができるまでの暫定的な研究対象と考える前者の立場とも、認知などの内的過程を推測して媒介変数を積極的に取り入れる後者とも大きく異なっている。また、認知や感情の存在を否定したと誤解されるが、こうした媒介変数を行動の原因とすることを否定しただけであり、随伴性の結果として生じる状態であると考えていた。

また、直線走路を用いて研究が行われていた時代に、レバーを押すと自動的に餌が出てくる仕掛けを施したネズミ(ラット)用の箱型実験装置スキナー箱や、反応の記録装置として累積記録器を考案。スキナー箱はその後、さまざまな実験動物用に改変され、薬理学や遺伝学の研究にも活用されている。

その後、理論化したオペラント条件づけの教育的応用としてのプログラム学習と、これを具現化したティーチング・マシンを開発。のちのコンピュータ支援教育(CAI)やCBT、WBTといった個別学習方式に少なからぬ影響を与えた。

またもともとは小説家志望であったことを反映してか、小説の執筆など作家活動も行っている。代表作は、ソローの「ウォールデン:森の生活」を下敷きに心理学的ユートピアを描いた「ウォールデン2」。

現在、スキナーの業績に基づいた実戦理論は応用行動分析(ABA)として発展し、会社組織での人材育成や学校での学習教育のほか、発達障害児の支援教育、カウンセリング場面(臨床行動分析と呼ばれることが多い)やイルカ・猛禽・犬などのペット動物の訓練技術として幅広く応用されている。

[来歴]

ペンシルベニア州 Susquehanna Depot 生まれ。ハーバード大学卒業。

ミネソタ大学、インディアナ大学の教職を経て、1958年からハーバード大学心理学科 Edgar Pierce Professor を務めた。

1968年に、ジョンソン大統領よりアメリカ国家科学賞(生物科学部門)を授与されている。

1990年に白血病で死去。

[著作]

邦訳のあるもの

『心理学的ユートピア』宇津木保、うつきただし訳(誠信書房, 1969年)

『教授工学』村井実、沼野一男監訳;慶應義塾大学学習科学研究センター訳(東洋館出版社 1969年)

『自由への挑戦: 行動工学入門』波多野進、加藤秀俊訳(番町書房 1972年)

『行動工学とはなにか: スキナー心理学入門』犬田充訳(佑学社 1975年)

『行動工学の基礎理論 伝統的心理学への批判』玉城政光監訳(佑学社, 1976年)

『楽しく見事に年齢をとる法 いまから準備する自己充実プログラム』M.E.ヴォーン共著 本明寛訳(ダイヤモンド社 1984年)

『人間と社会の省察 行動分析学の視点から』岩本隆茂ほか監訳(勁草書房 1996年)

『科学と人間行動』河合伊六ほか訳(二瓶社 2003年)

『初めて老人になるあなたへ ハーバード流知的な老い方入門』M.E.ヴォーン共著 大江聡子訳(成甲書房 2012年)

『自由と尊厳を超えて』山形浩生訳(春風社, 2013年)

徹底的行動主義

徹底的行動主義は、バラス・スキナーが自身の研究(実験行動分析学)の成果を基盤とし、構築した哲学である。行動主義心理学に属している。

徹底的行動主義では、行動をレスポナント行動(誘発される行動)とオペラント行動(自発される行動)を区別して研究する。そして、先行する刺激なくとも自発される行動(オペラント行動)を研究するため、刺激-反応連合として行動を研究する S-R 心理学とは区別される。

感情や感覚とされるものも刺激であり、認知とされるものも行動であると考え、ある特定の個体だけが知ることでできる出来事(私的出来事)も研究対象とする。私的出来事は、主観的だと排除されないが、観察された対象の信頼度には疑問があるとされる。また、認知は行動の原因ではなく説明されるべき行動であるとされる。なぜなら、内的行動は直接操作が不可能であり、行動を操作するための独立変数として利用できないと考えるためである。

環境と行動の相互作用を研究することを基調とする。

行動の説明には淘汰の歴史や生物学の知識が必要であると主張する。そのため、行動の経験性だけでなく生得性をも認めている。

モデリング

モデリングは、何かしらの対象物を見本(モデル)に、そのものの動作や行動を見て、同じような動作や行動をするのがモデリングである。

人間(主に子供)の成長過程では、モデリングにより学習・成長するとされている。思春期から大人にかけての時期では、憧れの意識から、対象の人物に少しでも近づきたいという心理が発することがある。また、芸能人のファンが、その対象人物のファッションや仕草などを真似るのは、モデリングのひとつである。

・行動主義心理学用語 10 は、
オープンライセンス文書を元に作成されたものです。

この行動主義心理学用語 10 は、
江川剛史から情報商材を購入した人のみ、
アフィリエイト用の特典として一次配布することが可能です。

もし、貴方が、江川剛史以外から、
この教材を配布された場合は、
江川剛史から情報商材を購入しない限り、
一次配布は行えません。

貴方も、この教材を配布したい場合は、

こちらから心理学アフィリエイトを購入してください。
<http://egawa-takeshi.com/shinrigakuafi/>

その他、江川剛史は、
高額塾レベルのアフィリエイトノウハウを、
無料で教えるメール講座、
『アフィリエイト専業で自由になる方法』を配信しています。

アフィリエイトでは、
稼いでいる人は、年間 1 億 8000 万円以上稼いでいますし、
年間数百万稼いでいる人は、無数にいます。

ぜひ、私の無料メール講座にて、
アフィリエイトノウハウを学んでみて下さい。

メール講座の読者解除は、
いつでも無料でメール内にて行えます。
<http://egawa-takeshi.com/lp/landingpage.html>

『1700 個以上の特典付き』情報商材レビューランキング
<http://egawa-takeshi.com/rebyu/>

それでは、お読み頂き、ありがとうございました。

ぜひ、学んだ知識を活かして、実践してみてください。